

MOOC が起こす社会革命

ぶぎん地域経済研究所 調査事業部長 松本 博之

オンライン講座

冒頭から横文字の話で恐縮だが、MOOC（ムークと発音）というものをご存じだろうか？

私もつい数カ月前に知ったばかりの単語である。意味を知った時は、「じえ、じえ、じえ」という感じだった。「Massive Open Online Course」の頭文字を取ったもので、日本語訳は「大規模公開オンライン講座」になるらしい。簡単に言うと、パソコン、タブレットやスマホで世界の一流大学の人気講座が受けられるシステムだそうだ。しかも無料で！「15世紀の活版印刷機の発明に匹敵するものだ」と評価する専門家もいるとか。

終了認定証を発行

MOOCの特徴は、単に講座を受けるだけでなく課題や試験もあって合格すれば修了認定書が発行される。また受講者のコミュニティもあるから、疑問を世界中の“同級生”間で解決できる。一つの講座について5万人、10万人といった数の学生が登録しているそうだ。今秋から東京大学が参加している最大サイトの「コーセラ」は、約500万人が登録している。他に「エデックス」（来春から京都大学が参加予定）や「ユダシティ」というサイトもある。

世界の一流大学は、世界中から優秀な学生を呼び寄せ、教育研究水準の高さをアピールする場として考えている。別に無料で、「おもてなし」をしているわけではない。

学ぶ機会の増大

そこにはしたたかな長期戦略がある。それを物語るものとして、モンゴル人少年の話がある。彼はアメリカの大学への入学を希望していたが、学費等の問題でそれは夢のまた夢。そこで彼は「エデックス」を通じてマサチュ

ーセツ工科大学の講座を受講、優秀な成績で複数の講座を修了したところ、学費免除で入学が認められたということだ。

大学側としても、これまででは知ることが出来ない優秀な学生を発掘することができ、彼が将来、研究者となり研究業績を通じて大学へ「倍返し」してくれれば授業料無料なんて安いという算段である。MOOCは、大学キャンパスの物理的な問題を打ち破るだけでなく、授業料を払い、大学へ通うというこれまでの大学教育の在り方を大きく変えることになるであろう。大学に行かずとも個人で学ぶ機会が増大する。

開かれた知識の扉

大学教育の多様化に、大学の価値とは何かを問いだしている。MOOCは、アメリカ建国の父、ベンジャミン・フランクリンの「知識の扉は常に開かれている」という言葉の理想に沿っている。アメリカで始まったのも歴史の偶然とは思えない。

学びたい人がいつでもどこでも、また何歳になっても学習リソースにアクセスできる。大学で勉強するのは、「いつ？今でしょ！」という感じだ。昨日までの「引きこもり」が明日の「グローバル人材」へ変身となる可能性も大きい。

企業側も、ここで優秀な成績を上げた人を国籍を超えて採用する動きもあるようだ。こうなると大学と合せて将来、就職活動も変わるかも知れない。

大半の講座は英語だが、「コーセラ」はいよいよ日本語の翻訳サービスを始める、修了者の割合は平均5%程度と課題はあるものの、将来の教育制度を含めた社会生活を大きく変える萌芽であると思える。

（本稿は埼玉新聞10月4日に掲載したものです）